

鹿毛馬神籠石

福岡県嘉穂郡潁田町所在鹿毛馬神籠石の調査

潁田町文化財調査報告書

第 1 集

1 9 8 4

潁田町教育委員会

石籠神馬毛鹿

1984

額田町教育委員会

序

この冊子は、昭和57年度に策定した史跡鹿毛馬神籠石保存管理計画に基づき、昭和58年12月から同59年2月にかけて実施した鹿毛馬神籠石緊急調査の報告書ですが、我が国古代史研究の一資料として活用していただければ幸甚に存じます。

なお、本書刊行にあたり、例年になく厳冬のなか、雪や氷と闘いながら調査を行なって本報告書を執筆していただいた福岡県教育庁文化課宮小路賀宏調査第1係長、教育庁筑豊教育事務所井上裕弘技術主査をはじめ諸先生方、および御協力いただいた地元関係者の方々に深甚の謝意を表します。

昭和59年3月31日

額田町教育委員会

教育長 白 旗 一 郎

例 言

1. 本書は、昭和58年度に潁田町教育委員会が、国・県の補助を受け、福岡県教育委員会の協力によって発掘調査した鹿毛馬神籠石の調査報告書である。
2. 遺構の実測は井上裕弘・木下修・池辺元明・日高正幸・高田一弘があたった。遺物の実測は井上が、製図は豊福弥生氏の協力を得た。遺構写真は井上が、遺物写真は平島美代子氏の協力を得た。遺物整理は県文化課岩瀬正信氏の指導のもとに九州歴史資料館で実施された。なお、座標点設定にあたり朝日航洋株式会社の協力を得た。
3. 本書の執筆は、Ⅰ・Ⅴを宮小路賀宏が、他は井上があたり、編集は井上が行った。

本文目次

Ⅰ はじめに	1
Ⅱ 位置と環境	3
Ⅲ 水門跡の調査	4
(1) 第1暗渠	4
(2) 第2暗渠	9
(3) 水門部列石と土塁	11
Ⅳ 列石線の調査	13
Ⅴ おわりに	19

I は じ め に

鹿毛馬神籠石の列石については、貝原益軒がその著「筑前続風土記」に馬牧の石垣として記述している。昭和に入って地元民による列石の発掘が行われ、また同14・19年には水門跡の暗渠の発掘が実施されたりして、地元の保存への気運が高まり、昭和20年2月22日に「鹿毛馬神籠石」として国の史跡に指定された。

指定の後の昭和28年には、水門跡の保存のための資料を得る目的から発掘調査が計画され、森貞次郎氏が指導して実施された。

史跡指定地は、列石を中心に巾10間（18m）の帯状指定であったが、当時としては現今の開発を予期できなかったことはやむを得ないことと思われる。しかしながら、近年各種造成工事の影響を受け、指定地に接するような土取り工事が行われたりして、史跡の保護に憂慮すべき状況となった。このことから指定地の見直しと今後の保存管理を進めるために昭和56・57年の2年度にわたって鹿毛馬神籠石保存管理計画策定事業が実施された。

史跡指定地は、列石線の不明な部分（東半部）においても推定して指定されていて、指定地の見直しにはこれの確定が急務であり、また、史跡の整備・活用に当っては神籠石の特性から水門跡が大きなポイントとなり、その構造の解明が必要である。また、水門跡の暗渠は以前に確認調査が実施されているものの、取水口・排水口の位置が何処に在るのか不明であることからこれの確定をしなければならない。このことから今回の発掘調査が計画実施されたのである。

調査は昭和58年12月15日から昭和59年2月15日の間に実施され、調査関係者は次のとおりである。

調査責任者	颯田町教育委員会	教 育 長	白旗 一郎
	同	教 育 課 長	白土伊三男
	同	社会教育係長	貝嶋 宇生
調査担当者	福岡県教育庁文化課	調査第1係長	宮小路賀宏
	同	主 任 技 師	木下 修
	同	同	池辺 元明
	福岡県教育庁筑豊教育事務所	技 術 主 査	井上 裕弘
調査補助員		日 高 正 幸	高田 一弘

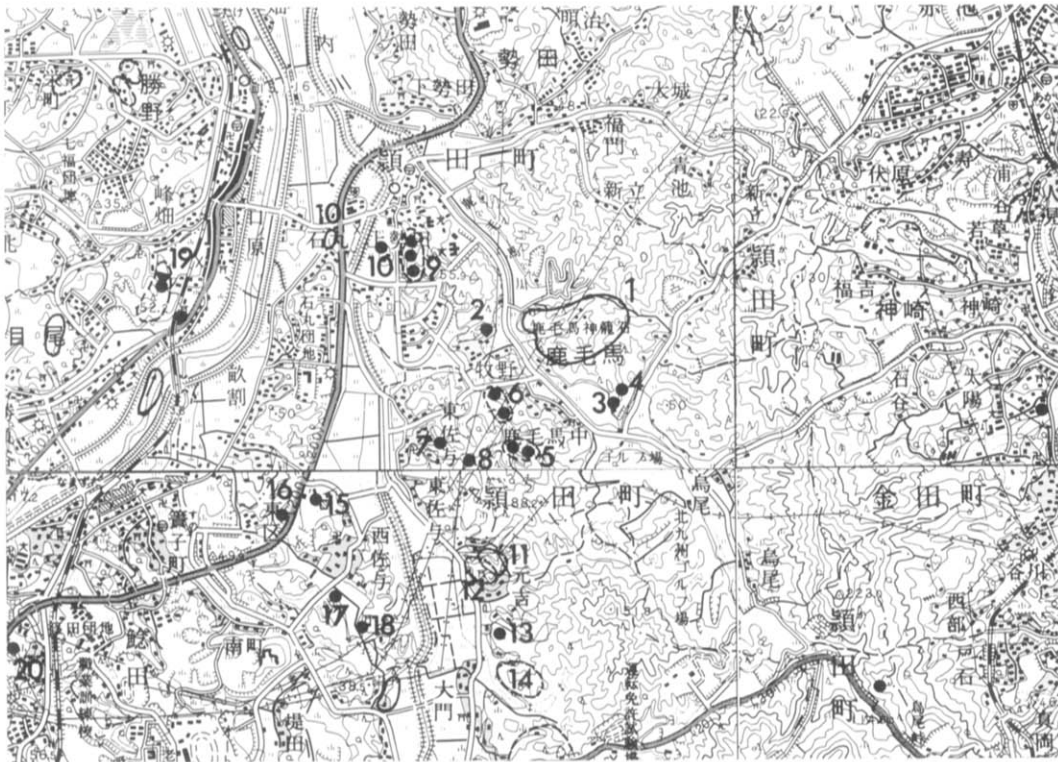
この他、九州産業大学森貞次郎教授、県文化課長藤井功氏、同主任技師磯村幸男氏、筑豊教育事務所社会教育課長鎌田俊浩氏の指導・助言を得た。発掘作業にあたっては地元の方々、並びに整理作業にあたっては九州歴史資料館の方々の御協力を得た。記して謝意を表します。

発掘作業員

古賀浅次郎	伊藤 一夫
吉木 利雄	桑原 政市
松原 大助	高盛 栄
野崎 勇	安藤 初美
河野 治幸	神田太芽一
富永 春美	安藤三重子



第1図 発掘風景



- | | | | |
|------------|------------|------------|-------------|
| 1. 鹿毛馬神籠石 | 2. きょう塚古墳 | 3. 古賀の下古墳 | 4. まさご古墳 |
| 5. 椿山古墳群 | 6. 清水古墳群 | 7. 鬼坂古墳 | 8. 亀の甲古墳 |
| 9. 十郎古墳群 | 10. 石丸遺跡 | 11. 元吉遺跡 | 12. 元吉古墳群 |
| 13. 大門古墳 | 14. 大谷古墳群 | 15. 北の浦石棺 | 16. 北の浦横穴 |
| 17. 谷頭1号石棺 | 18. 谷頭2号石棺 | 19. 山ノ谷古墳群 | 20. 井手ヶ浦窯跡群 |

第2図 周辺遺跡分布図(1/50,000)

II 位置と環境

鹿毛馬神籠石は、福岡県嘉穂郡潁田町大字鹿毛馬字田中、古賀下、新中、悪所谷、小堤に所在する。

潁田町は、福岡県のほぼ中央部嘉穂郡の北端に位置している。北から東は標高100～200mの山々に囲まれ、西には遠賀川が北流している。その一支流である庄内川が町の中央を流れ、狭長な沖積平野を形成している。東方には鹿毛馬川が田川郡との郡境をなす烏尾峠に発し、北東に流れ、勢田付近で庄内川に合流し、大畑付近で遠賀川となっている。

鹿毛馬の神籠石は、その鹿毛馬川が形成した小平野の南側にある標高42～75mを測る馬蹄形の丘陵上に位置している。

周辺には、5世紀後半の古墳として著名な、きょう塚古墳がある。縄掛突起を有す箱式石棺をもつ円墳で、棺内外から鹿角製刀装具・大刀・短刀・刀子・鉄鏃・鋤先・鉄斧など多くの副葬品が発見されている。同じ丘陵上には後期の古墳群と思われる椿山古墳群をはじめ、清水古墳群、鬼坂古墳、亀の甲古墳、十郎古墳群など数基からなる小単位の古墳群が形成されている。また、庄内町に入るものの、10数基からなる元吉古墳群、大谷古墳群などの群集墳も近在している。

一方、神籠石のある鹿毛馬川東岸には古賀の下古墳、まさご古墳が知られるだけで極めて希薄である。

神籠石の年代には諸説あるものの、7世紀前半説と後半説が現在最も有力視されている。

そうすれば、これら古墳群を築造した人達が、神籠石の築造者と無縁のものとは思われず、謎につつまれた神籠石の調査と同時に、これら古墳群ひいては集落跡の調査が今後必要なこととなろう。

また、今回の調査で出土した須恵器甕についても、生産地となる窯跡との関連も追求する必要がある。この時期の須恵器窯跡として最も近い位置にあるのは、最近調査された飯塚市井手ヶ浦窯跡群である。整理が進展した段階で検討すべき問題であろう。



第3図 鹿毛馬神籠石航空写真

III 水門跡の調査

調査は、すでに知られていた南端部の水門跡とその前後の構造を解明するため、まず水門跡と指定されている保護柵内の調査から開始した。通水溝の方向を確認し、前後にトレンチを設定し、特に、後背部については後部列石及び取水口の構造を知るため広範囲の調査が必要となった。また、通水溝前面の構造について、前を流れる鹿毛馬川まで通水溝のような暗渠が付設されているという意見があったため、河川との中間地点にも南北にトレンチを設定した（付図1）。

その結果、全長18mにおよぶ通水溝、取水口及び排水口左右にT字状に構築された裏込め状の石積、取水口前面の水溜遺構、前面列石に対応する背後列石、その前後の柱根、列石内から検出された柱根及び杭列など水門の構造を知る上で幾多の成果を得た。また、前面列石を調査する過程で、土塁北端部から新たな暗渠が発見されたことは大きな成果であった。前者を第1暗渠、後者を第2暗渠とした。

(1) 第 1 暗 渠（第4～12図、付図2・3）

排水口 前面列石より4.5m西側に突き出した状態で暗渠が設けられ、排水口の左右には中小



第4図 水門部発掘区全景（南から）

の割石や碎石を積み上げ幅約3 m、高さ1 mの裏込状の石積を構築している。石積は青灰色粘土の地山を暗渠に直角に掘り込み築造したもので、南端部は確認できた。暗渠中心より6 mを測る。北端部は確認していないが、対称とすれば12 mの石積が築かれていることになる。

暗 渠 取水口から排水口までの全長18 m、前面列石から排水口まで4.5 m、前面列石から背後列石まで9 m、背後列石から取水口まで4.5 mを測る。暗渠の石組は、側壁基底に75×40 cm前後の大き目の半加工石を立て、その上に長さ25～100 cm、幅10～35 cm前後の横長の小さい石を二～三段に横積みしている。底石は大小あるが板石を敷いている。敷石は排水口の蓋石下まで、その前面には存在せず直接自然放流しているようである。側壁の高さは60～90 cm、左右の間隔約35～50 cmで、その上に長さ75～100 cm、幅25～65 cm前後の横長の石で蓋をし、隙間は小石で石詰している。暗渠の底面は取水口から排水口まで緩やかに傾斜し、高低差70 cmを測る。これまで、



第 5 図 第 1 暗 渠 全 景 (西から)



第 6 図 排 水 口

このような暗渠が前を流れる鹿毛馬川まで続くという意見があったため、排水口前面を上げると同時に、河川との中間位置にトレンチを設定した。しかし、水田下約2 mを掘り下げても暗渠等の施設は検出されなかった。また、2 m下をさらに、約2 mのボーリング棒による調査を実施した結果でも石組等の存在は確認できず、谷基底部も判明しなかった。このことは排水口前面の谷部が極めて深いことを物語るものといえるだろう。

背後列石 前面列石より9 m東から検出されたほぼ並列する列石で、切石を使用し、丁寧に構築した前面列石と異なり、未加工ないしは半加工ともいえる大小の石を粗雑に配列したものであった。確認部分で全長8 mを測る。また、北側未掘部をボーリング調査した結果、9.3 mの所まで存在することが判った。このような背後列石の粗雑さは他の神籠石でも知られていることである。

取水口 背後列石より暗渠はさらに4.5 m東側に突き出し、取水口となっている。取水口の



第7図 背後列石と取水口



第8図 取水口

左右には排水口と同様、中小の自然石・割石・碎石等を積み上げた裏込め状の石積を構築している。幅1.85m、高さ0.9mを測り排水口の石積に比べ規模が小さい。取水口の暗渠幅は85cmと若干広く、1mは無蓋である。

水溜遺構 取水口前面は導水を容易にするため、青灰色粘土の地山を掘り込み、溜桝状の遺構を構築している。その規模・構造は未掘部を多く残すため不明であるが、谷に流入した水を暗渠に導くために人工的に掘削されたものであることは明らかであり、最深部の北東隅で標高14.887mを測り、取水口より約11cm深くなっている。水溜遺構内には多量の流木や腐植土が堆積し、取水口への流水が著しかったことを示している。



第9図 須恵器出土状態

水溜遺構の南側肩部からは須恵器甕破片が地山に密着して数点出土した。その南東隅には性格は不明だが溝状遺構が掘り込まれ、その埋土中からは前記須恵器と同一個体と思われる須恵器甕破片が1点出土した。これは神籠石の築造年代を決める貴重な資料となろう。



第10図 背後列石と柱根

柱根 柱根としては前面列石と背後列石の前から検出されたものと、背後列石の内側2mの暗

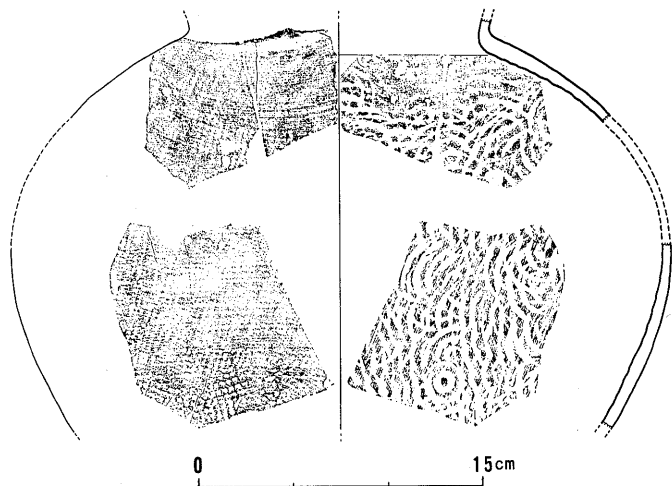
渠左右から検出されたものがある。前列石の柱根は、昭和18年の上田三平氏調査時に確認されていた3本（A・B・C）の内、Cの柱根が残存したのみで、昭和28年の森貞次郎氏の実測図と同一である。また、昭和23年頃A・Bの柱根は抜き取り、役場に収納したという伝聞とも一致している。^(註1)残存したCの柱根は径30cmを測り、列石側に傾斜している。

背後列石前面の柱根は、暗渠南側から検出された1本で、径35cmを測り、列石側に内傾している。暗渠北側については、現在の暗渠が付設されているため調査できず確認できなかった。このように列石前面の柱根がいずれも内傾するものであることは、すでに調査されている佐賀県おつば山・帯隈山・福岡県女山神籠石等の柵柱とも共通する構造のものである。

背後列石内側2mの所から検出された2本の柱根は、暗渠左右に並列するもので、径45cmと太い柱を直立して建てている。内傾する列石前面の柱根とは明らかに異なっている。前列石と背後列石の間は、現在土塁は存在しないが、本来土塁が構築されていたと思われ、この柱根は土塁内に建つことになる。土塁内の柱根の存在は他例がなくその性格を即座に決しえないものの、築地等の構築物が土塁上に作られていた可能性があるかもしれない。

出土須恵器 水溜遺構の南側肩部付近地山上と南東隅の溝状遺構内から出土した須恵器の甕破片数点である。水門築造時の土器の可能性が高い資料といえる。しかし、いづれも胴部破片のため、年代の決め手にするには不十分といわざるを得ない。破片をもとに復原実測すると、最大径を胴上半に有す肩の張った長胴の甕となる。須恵器甕としては中形の部類に属し、器内も薄く作りの良い焼成良好な土器である。胴部外面格子目タタキのあと、肩部付近はカキ目、下半はヨコナデしていて、格子目タタキを残している。格子目タタキは2×3mmの長方形の刻目である。胴部内面同心円文のタタキで、頸部内面はヨコナデで仕上げている。色調は淡灰色を呈す。復原胴部最大径34.8cmを測る。

現在、須恵器の甕による時期の決定は極めて困難ともいわれる。器形的にも須恵器の出現以来、大きな変化もなく編年の資料からはずされてきたともいえる。とりわけ、胴部資料のみということが一層難しくしている。ここでは胴部内外に施されたタタキ痕をもとに、若干の見通しをたててみたい。胴部外面の格子目文タタキについては、陶質土



第 11 図 須恵器実測図(1/4)



第12図 須 恵 器

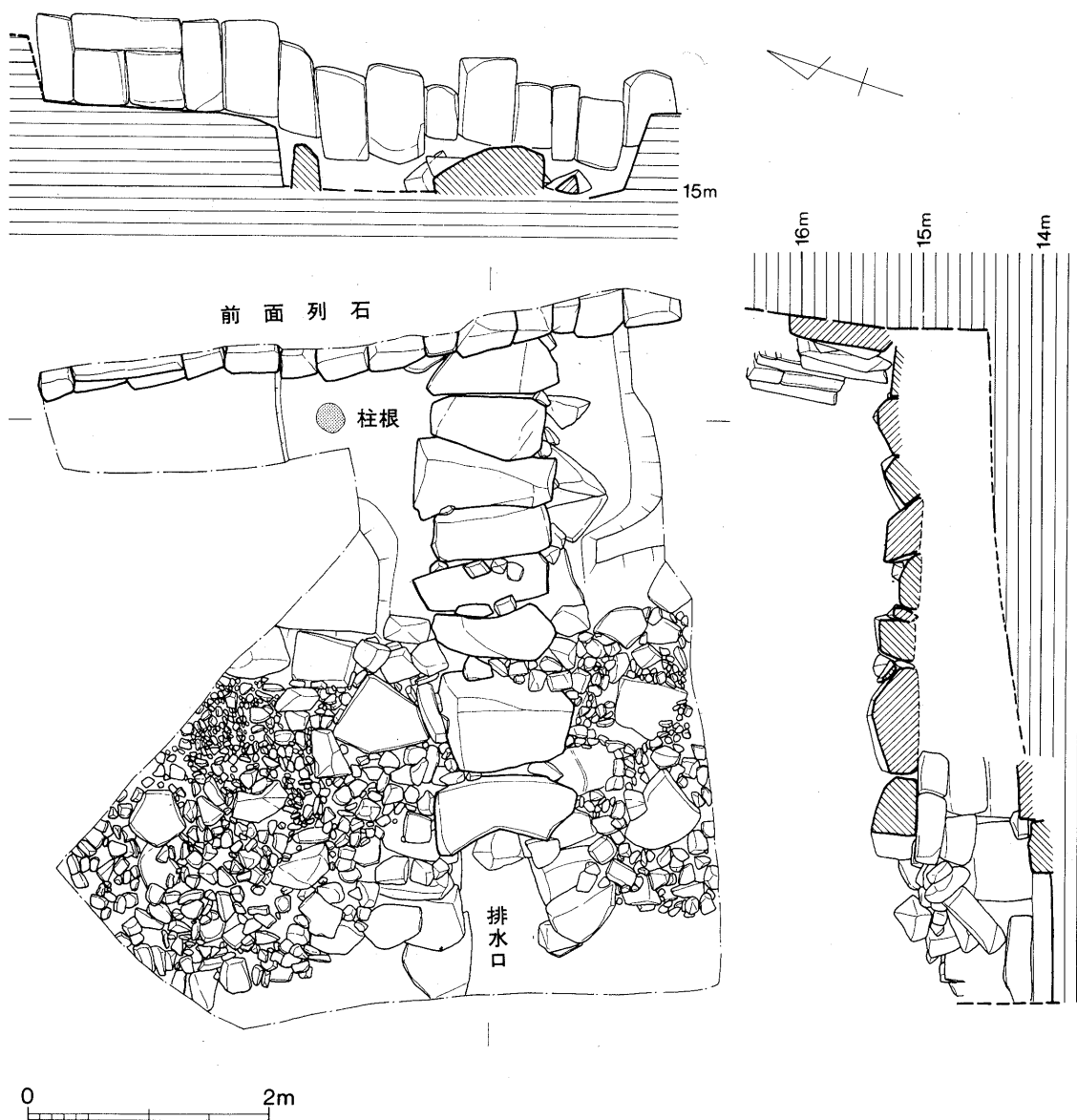
器、須恵器出現以降使用されてきたタタキで、内面の同心円文タタキも同様である。しかし、各期に多用されたタタキはそれなりに一定していたともいえる。

因みに、神籠石の年代については各説あるが、7世紀前半説と後半説が有力な説とされている。ここでは、その前後の須恵器甕に使用されたタタキ痕を手掛りに、本土器の上限について検討してみよう。小田富士雄氏の編年に従い検討すれば、Ⅲa～Ⅳa期のものはその大半が外面平行タタキで、中には擬格子ないしは格子目風とも呼ばれるものが存在するものの、明瞭な格子目文は存在しないようである。しかし、Ⅳb期になると平行タタキが基本というものの明瞭な格子目文が多用されはじめるようである。太宰府市神ノ前1・2号窯跡の資料がそれを代表するものであろう。また、大野城市中通古墳群（10号墳）、那珂川町観音山古墳群の資料などがある。また、Ⅴ期以降も平行タタキとともに多用されるタタキのようであるが、この時期の甕の資料で報告されたものが極めて少なく不明な点を多く残したともいえる。

しかし、その上限については少なくともⅣb期に設定することは可能であろう。因みに7世紀初頭から前半の年代が与えられよう。

(2) 第 2 暗 渠 (第13・14図、付図2)

前面列石下より5.4m西側に突き出し、第1暗渠と同様、排水口両側は中小の割石や碎石を積み上げ、幅2.9m、高さ1.15mの石積を構築している。その規模は未調査のため不明であるが、



第13図 第2暗渠実測図(1/60)

第1暗渠と同じ12m前後のものであろう。

暗渠の構築は、列石・土塁築造に先だって行われている。青灰色粘土の地山を1.8～3mの幅で掘り込み、そこに暗渠を石組し、排水口左右には直角に地山を掘り込みその内部に裏込状の石積を築いている。



第14図 第2暗渠（西から）

暗渠の石組は、側壁基底に60×70cm前後の大形の石を立て、その上に長さ60cm、幅20cm前後の横長の小形石を二段に横積みしている。底石は大小まばらだが板石を敷いている。敷石は排水口の蓋石下までで、その前面にはみられず直接谷部に排水しているようである。壁石の高さは80～95cm、左右の間隔約50cmでその上に8個の蓋石が置かれ、隙間は小石で目詰されている。蓋石は半加工ともいえる横長の石（長さ1～1.2m、幅0.4～0.9m）を使用している。列石背後の構造は未調査のため不明だが、列石下の底石と排水口の高低差は30cmを測る。

暗渠の規模は第1暗渠より大きく、使用している蓋石等も大きいものが多いといえる。

(3) 水門部列石と土塁（第15～17図、付図2）

土塁は狭い谷部を塞ぐように構築された築堤で、現存部で全長約38mを測る。第1暗渠東側の土塁は、田圃の開削によってか消失している。土塁の幅は、北端部が最も広く、現状で裾部幅18mを測り、最も狭い中央部で5m、高さ約1.2～2.3mを測る。

前面の列石は、全長50mにわたり検出した。一部南端は未掘だが、谷部列石のほぼ全貌を検出したといえる。南端部列石が後世の攪乱で乱れていた他は、丁寧に面取りした切石が隙間もなく配列され、緩やかな湾曲線を描いている。その景観は見事ともいえ、谷部という地盤の



第 15 図 水門部列石(北から)



第 16 図 水門部列石(南から)



第 17 図 列石・柱根・板

悪い所での構築技術は、今日の土木技術をも凌ぐものであろう。水門部に使用した列石は、外郭列石と異なり、小形の縦長の石を立てて使っている。しかし、外郭列石に続く北端部では横長の大きい石を使用している。列石はいずれも一段であるが、第2暗渠北側に横長の石を2個の小さい縦長石の上に横積みした所が一カ所ある。

背後列石については、第1暗渠東側の全長9mを確認しただけであるが、使用した石は未加工、半加工した程度のもを粗雑に配列したもので、精巧な前面列石と対照的である。

前後列石と土塁との関係は、直接断ち切った調査は実施していないが、前後列石間に土塁が築かれていたことは東側発掘区の北壁土層断面からも明らかである。その意味では、前後列石間の幅9mが土塁の当初の規模といえる。この長さは、佐賀県おつば山神籠石の幅とも一致するもので、唐尺30尺にあたることは興味深い。

土塁の高さについては、残りの良い第2暗渠で、列石上面から2.30mを測り、列石が土塁の基底部を止める土止石の役目を果していることが判る。

従って、列石前後に突出した暗渠遺構はそのまま露出していたものといえる。流水により運ばれた多量の流木や腐植土が堆積していたことから明らかで、他の神籠石にはみられない特異な構造を有す暗渠である。

列石の前面については、現在使用している暗渠が付設されていたため、十分な調査はできなかった。従って、前面の柱根についても三カ所を確認しただけで、柱間は中央から検出された2本の3mを知るのみである。また、中央発掘区からは幅約25cm、長さ3.95m、厚さ1.5cmの平板が柱根と列石の間から出土した。柵柱の横板として使用されたものと思われる。

IV 列石線の調査

列石線が不明な北東部山頂地区を中心に確認調査を実施した。昭和57年作成の史跡鹿毛馬神籠石地形図千分の一を原図として行った。まず、北東部北側斜面の未確認地区の調査から開始した。調査は草木の繁茂が著しく難行したものの、7カ所に部分的に残存していることが判明した(第18・19図)。

従って、7カ所の列石線上を伐採し、列石の露出作業と地形図にその位置をおとすための実測を行った。

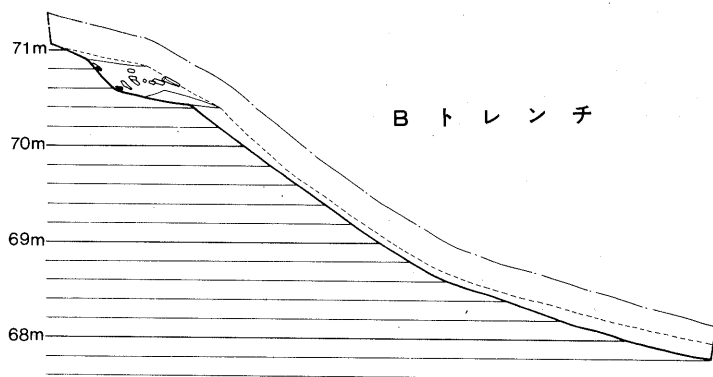
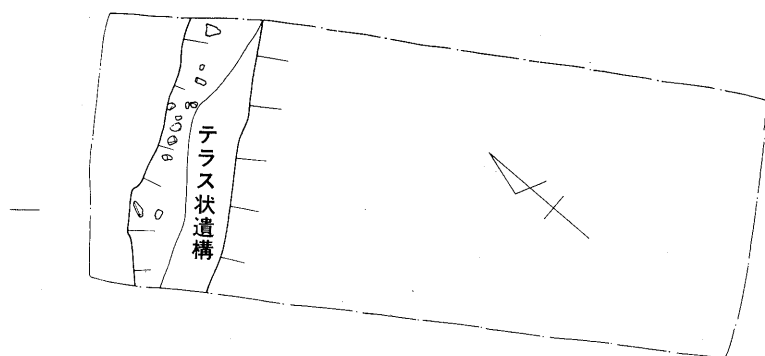
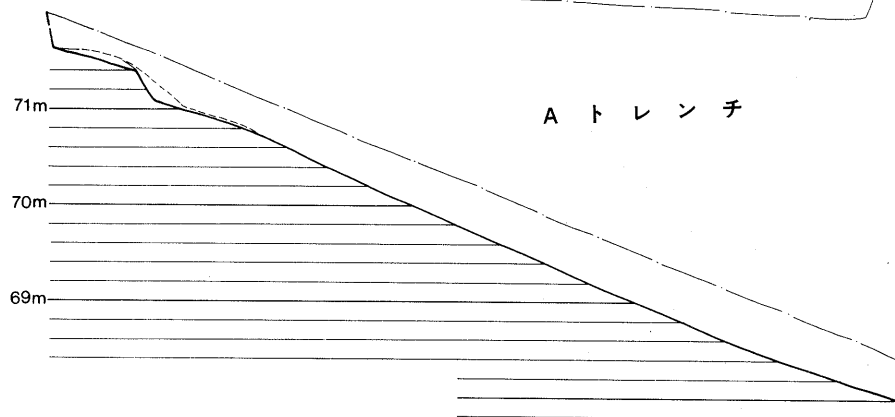
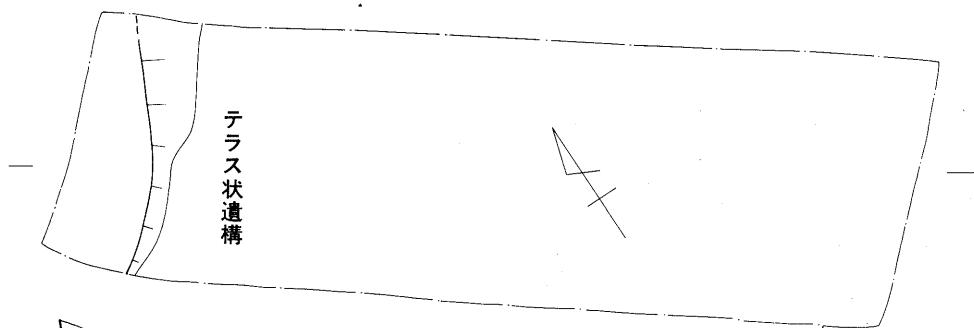
また、東側未確認地区についても、推定線をもとに伐採を進めた。地形変換や点在する転石等も考慮し、4カ所に幅3mのトレンチを設定した。(第20～23図、付図1)。その結果は、列石の存在は確認できなかったものの、A・B・Cの3トレンチから斜面を削り出したテラス状遺構が検出された。このテラス状遺構は列石を配列するために作り出されたものと思われ、Bトレンチのテラス上には原石加工時のものと思われる碎石が多量に散在していた。Cトレンチは



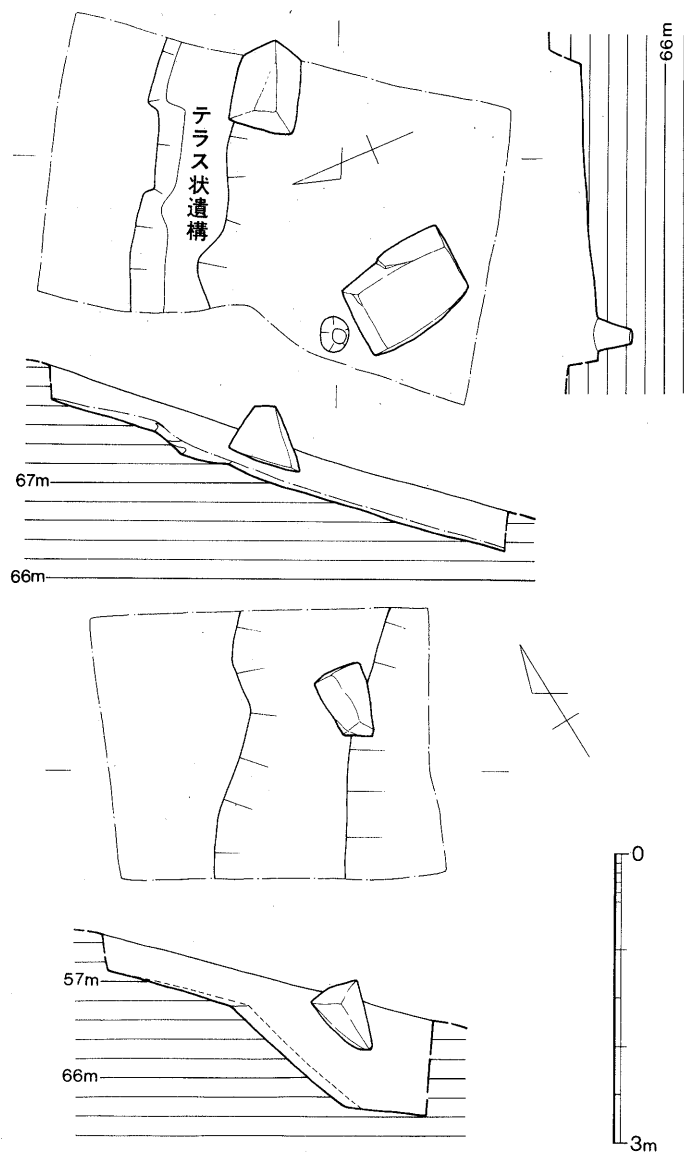
第 18 図 列石線の調査（北東側）



第 19 図 A トレンチ全景（西から）



第 20 図 A・B トレンチ 実測図 (1/80)



第21図 C・D トレンチ実測図 (1/80)

点在する加工石を中心にその前後を調査した結果、A・Bトレンチと同様、幅40～70cmのテラス状遺構が検出された。加工石の位置はそれより70cmずれていることが判った。また、列石前面に構築されたと考えられる柵柱の柱穴1個も検出された。柱穴は列石側に内傾しているものの深さ約40cmと浅く、柱穴径も約35cmと小規模で若干不安も残る。

Dトレンチも加工石を中心に設定したが、明らかに流出した転石であり、発掘区上方に存在したものと思われた。

以上の結果をもとに、未確認及び欠落部分の列石線を復原したのが付図1である。調査の結果は、いまだ充分なものといえないものの一応の成果としておきたい。



第22図 B トレンチ全景及びテラス状遺構



第 23 図 東側未確認列石線地区全景及び C トレンチ全景

また、北東部山頂のE地点には加工及び半加工した石材が6個集積されている。列石線工事で残った石材をそのまま放置した興味深い例であろう（付図1）。

V お わ り に

当該神籠石は、極めて低位置に立地する。水門跡前面の水田は標高約16m、郭内の最高所は約76mで、その比高差はほぼ50mである。西に開口する谷には水門跡があり、外郭線の占地は他と異なるものではない。ただ、谷は懐が広く平坦な形状であり、神籠石そのものが低位置にあることから湧水が多い。外郭線は三角形を呈し、長径約650m、短径450mである。水門跡及び列石に使用された石材は花崗岩である。

今回水門跡と東半部の外郭線の確定調査を実施した。

外郭線確定には4ヶ所にトレンチを設定して発掘した。列石は残存せず、他の神籠石にあるように列石前面の柱穴もわずかに一つが発見されたが、これも断定するには有力とは云えない。しかしながら、配石するためのテラス状遺構と、配石する際に調整を行ってできた石屑が確認され、外郭線の位置を明確にすることができた。この結果をもとに外郭線を復元すると全長約1980mである。

水門跡については、以前に暗渠の調査が行われていたがなお不分明なところもあり、構造を解明する調査を実施した。しかしながら、調査の時期を渇水期に設定したにもかかわらず湧水が多く、調査の進行に支障をきたした。通行のための門跡の確認までは到らなかった。

当水門跡が他の神籠石のそれと異なるのは、①前面の列石が一段であること。②背後の石列との間に詰め石が施されないこと。③郭内からの排水の施設として2ヶ所に暗渠があること。④暗渠は列石より下部に施設されていること。⑤前面の列石は水平でなく、第1・2暗渠の間で下位になること。⑥背後の石列の内側に前面の列石に平行して柱根（調査で2本を確認）があること。等である。

谷は懐が大きく幅も広い。したがって長大な水門が築造された。しかも平坦な谷であることから流水の処理と軟弱な地盤の制約を受けざるを得なかった。上記①～⑤はこの制約を考慮した設計であり、当該水門跡の特色と云える。

流水には二ヶ所に暗渠を設置して処理しているが、その位置は谷の中央をはずれた丘陵に近い左右に在る。しかも⑤に述べたように暗渠間の列石はその基底面が暗渠の蓋石と同じレベル位いまで下っている。第1暗渠の取水口部分に確認された水溜遺構は暗渠に集水するための導水路と考えられ、この施設によって無理なく排水していたものと思われる。

水門列石前面と背後の石列内に柱列が発見された。その柱間の距離は共に3.06mである。また、水門の幅はほぼ9mである。佐賀県所在のおつば山神籠石と一致する。

（註2）

水門調査によって須恵器甕が発見された。先に詳述したように出土状態は水門築造時に近接すると考えられる。破片であることから全体を知ることができず、また、この種甕の編年が不十分な状況であることから正確な年代決定をすることができないが、7世紀初頭を遡るものではない。神籠石については、明治以来今日まで種々の論考及び論争が行われてきた。1964年に実施されたおつば山神籠石の調査によって山城であることが確立されたが、その築城目的及び築城年代は未だ解決されていない。現在では6世紀中、7世紀中に築城されたと云う二説が有力である。当該調査では出土した須恵器から7世紀初頭以後であり、柱列間の距離及び水門跡の幅からおつば山神籠石と同様に唐尺の使用を考え7世紀のある時期であろうと推察する。

註1 保存管理計画策定委員会「史跡鹿毛馬神籠石保存管理計画策定報告書」 頤田町教育委員会 1983

註2 鏡山猛「おつば山神籠石」佐賀県武雄市史跡調査報告書、武雄市、1965。

なお、明治以来の研究史等については、小田富士雄編「北九州瀬戸内の古代山城」——日本城郭史研究叢書第10巻・1983——に詳細に解説されているので参照されたい。

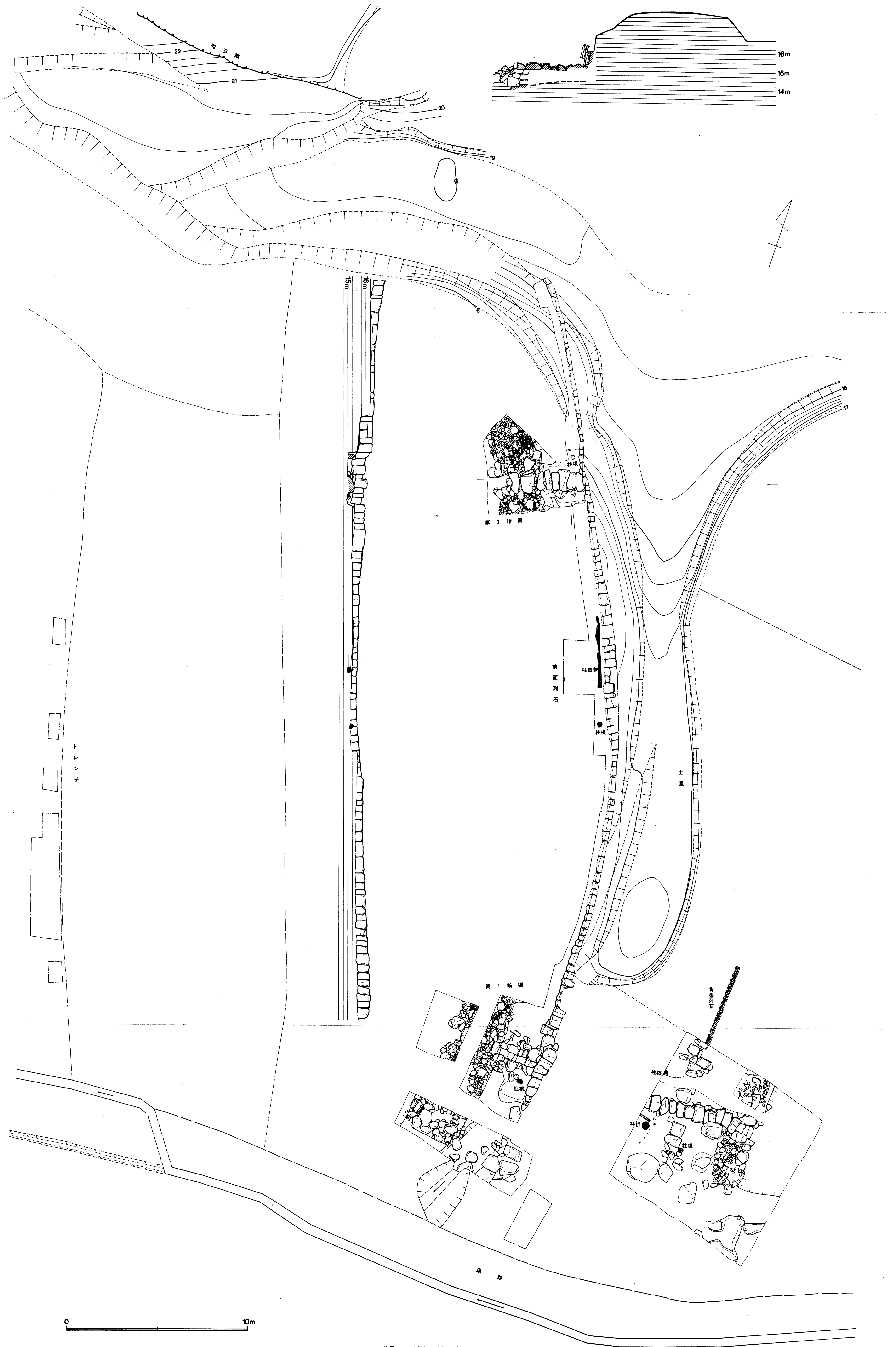
史跡鹿毛馬神籠石地形図



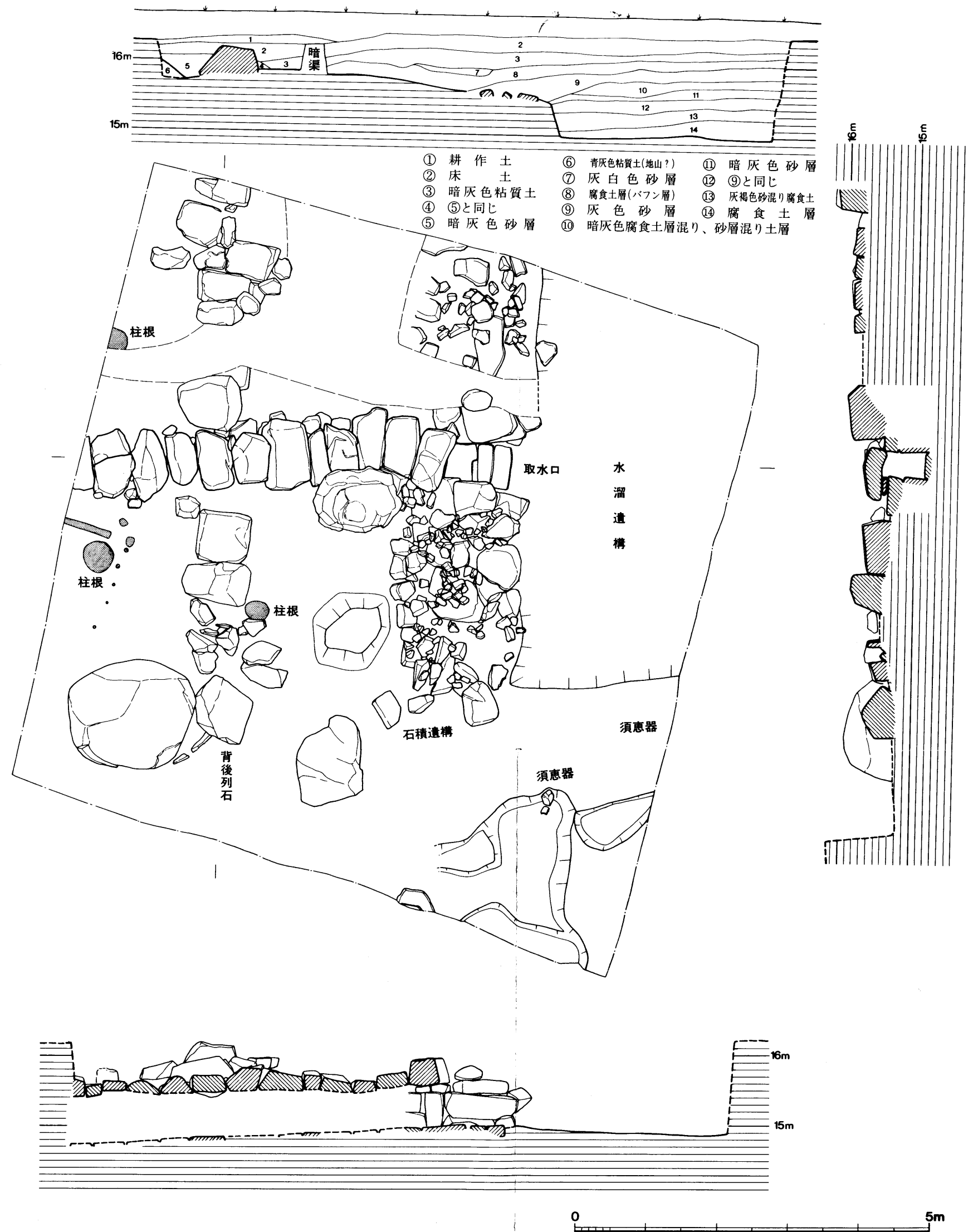
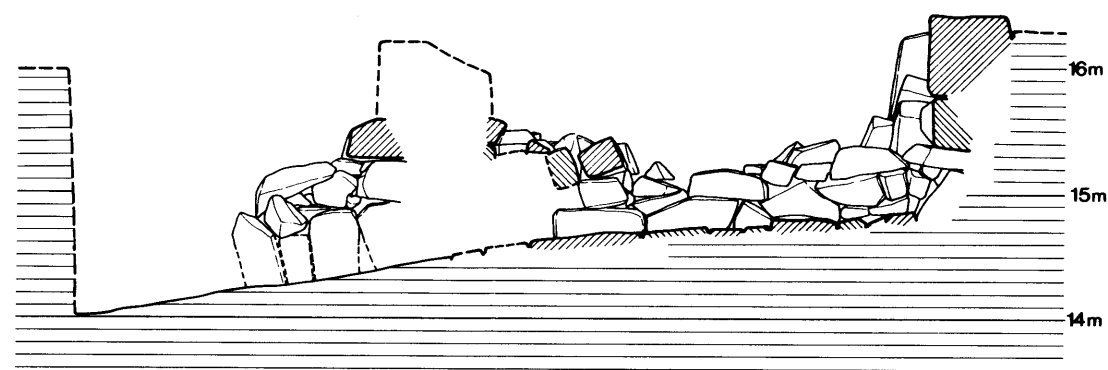
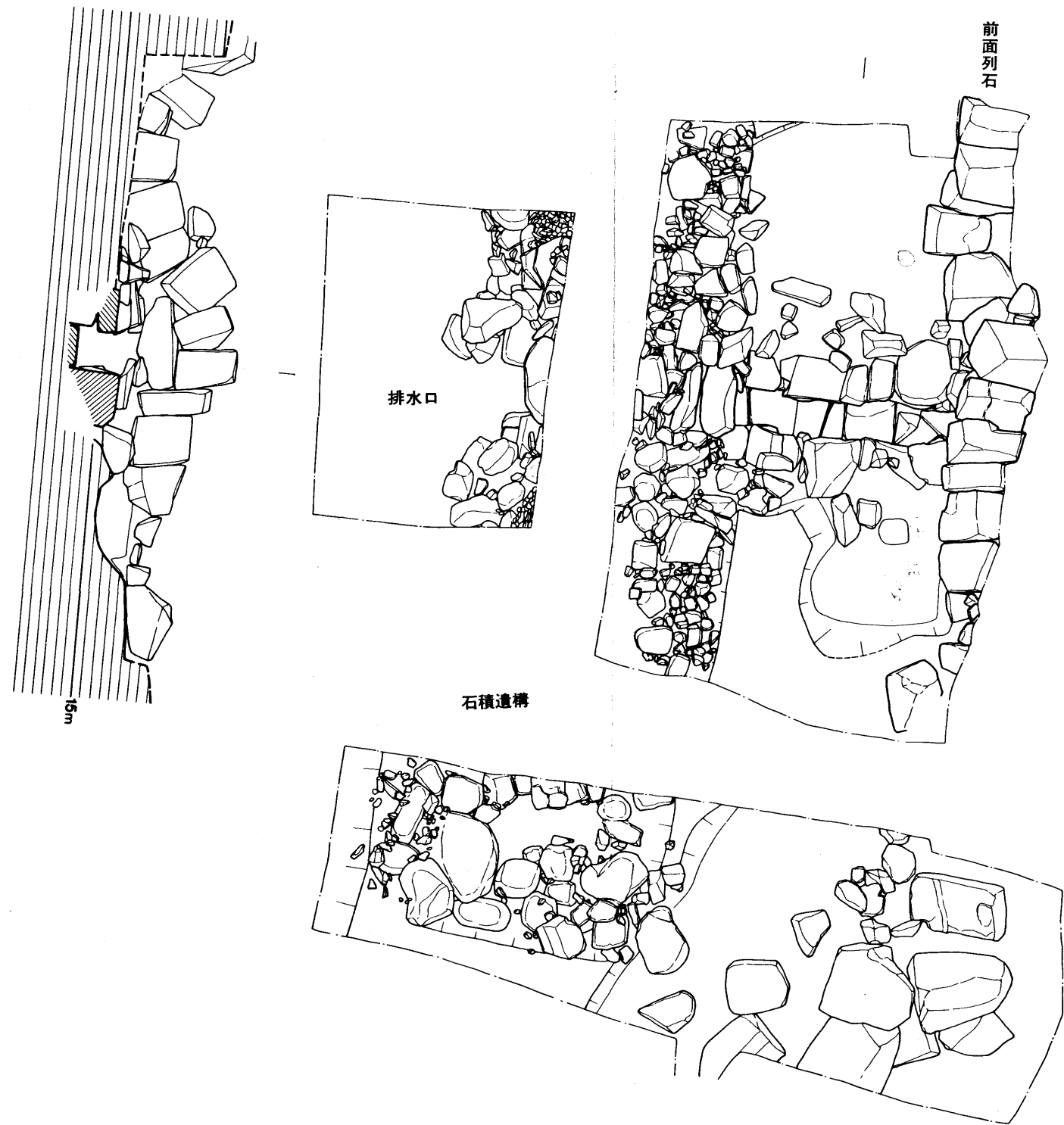
129°20' 34°15'
 129°20' 34°15'
 129°20' 34°15'

1:1,000

鹿毛馬神籠石
 田町教育委員会



付図 2 水門部地形実測図(1/100)



付図3 第1暗渠実測図(1/60)

鹿毛馬神籠石

昭和 59 年 3 月 31 日

発 行 穎 田 町 教 育 委 員 会
嘉穂郡穎田町大字勢田 1271-1

印 刷 青 柳 工 業 株 式 会 社
福岡市中央区渡辺通 2 丁目 9 の 31